

# フランシスコ教皇の演説

ファウンダーズ・メモリアル・ホール（アブダビ） 諸宗教の集いにて

2019年2月4日（月）

アル・サラモ・アライクム！ 平和が皆さんと共に！

シェイク・ムハンムド・ビン・ラシド・アル・マクトゥム殿下に、そしてアル＝アズハル大学のグランド・イマムであるアフマド・アル・タイブ博士に、心より感謝申し上げます。先ほどシェイク・ザイド・モスクでお会いしたムスリム長老会議のメンバー各位にもお礼申し上げます。

また、アル＝アズハル大学の地であるエジプト・アラブ共和国のアブドゥルファッターハ・エルシーシ大統領にも心よりご挨拶申し上げます。政府関係・宗教関係の皆さま、外交団の皆さまにもご挨拶申し上げます。皆さまの熱烈な歓迎に対しても、心からお礼申し上げます。

今回の旅を可能にくださったすべての方々、このイベントのためにプロ意識を持って熱心かつ献身的に働いてくださった方々、企画運営担当者、儀典関係者、警備担当者、また「裏方」として様々な形で貢献してくださった方々にもお礼申し上げます。グランド・イマムの前顧問モハメド・アブデル・サラム氏にも特別に感謝しております。

皆さま方の祖国から、わたしはこの半島にあるすべての国々に向けて、友情と敬意を込めて、心からご挨拶申し上げたいと思います。

主に感謝しつつ、アッジジの聖フランシスコとスルタンのマリク・アル＝カーミルとの出会いから 800 周年のこのとき、わたしは、平和を渇き求める信仰者として、兄弟と共に平和を求める兄弟として、ここに来る機会を得ることができました。平和を望むこと、平和を促進すること、平和のための道具となること — そのためにわたしたちはここにいます。

今回の旅のロゴはオリーブの枝をくわえた鳩を表しています。これは、原初の世界に起きた大洪水、さまざまな宗教的伝統に現れる大洪水を思い起こさせるイメージです。聖書の記述によれば、人類を破滅から守るために、神はノアに家族と共に小舟に入るよう求めました。わたしたちもまた、今日、神の名において、平和を守るために、共に、ただ一つの家族のように、嵐の中にある世界の海を渡ることができるような箱船 — 「兄弟愛という箱船」に入る必要があります。



出発点は、神がただ一つの人類家族の起源にあると認めることです。すべてのもの、すべての人の創造主である神は、わたしたちが兄弟姉妹として生きること、神がわたしたちに与えてくださった創造の御業である共通の家に住むことを望んでおられます。ここに、わたしたち人類共通の根源に、兄弟愛が、「神の創造の計画に含まれた召し出し(1)」として据えられているのです。それは、わたしたちすべてが同じ尊厳をもっており、誰ひとりとして他人の主人でも奴隷でもありえないということを語っているのです。

(1) ベネディクト 16 世、2010 年 12 月 16 日、駐バチカン新任大使への演説。

すべての人の人格、すべての人の命を守ることなしに、創造主を称えることはできません。神の目には、一人ひとりが同じように大切な存在だからです。神は、誰かを排除するえこひいきの眼差しではなく、皆を包み込む慈愛に満ちた眼差しで、人類家族を見ているからです。ですから、一人ひとりの人間に同じ権利を認めることは、地上において神の名を賛美することなのです。ということは、創造主である神の名において、いかなる種類の暴力もはっきり断罪されているということです、なぜなら、兄弟に対する憎しみや暴力を正当化するために神の名を利用することは、神の名に対する重大な冒涜だからです。宗教的に正当化され得る暴力は存在しません。

兄弟愛の敵は個人主義です、自分や自分の属するグループは他の人たちよりも偉いのだと考えたがる個人主義です。それは人生のすべての局面を脅かす畏です、人間が生まれながらにもつ最高の特権、つまり超越的なものにかかれ

た心、宗教心までも脅かす畏なのです。真の宗教心は心を尽くして神を愛し、隣人を自分のように愛することにあります。それゆえ、宗教に基づいて行動するにあたっては、繰り返し襲ってくる誘惑 — 他者を敵や反対者と見なす誘惑 — から絶えず清められる必要があるのです。すべての宗教は、敵か味方かに分類する傾向を克服し、すべての人を優遇も差別もせずに見守る天の視点を身につけるよう、招かれているのです。

それゆえわたしは、過激思想や憎しみを退け、寛容を選び、信教の自由を保証するこの国の姿勢を高く評価したいと思うのです。人間固有の要求でもある基本的自由 — 自分の信仰を表明する自由 — を促進しつつ、宗教が旗印として利用されぬよう、暴力やテロリズムを容認することによって宗教が自らを否定する危険を冒さぬよう、警戒を怠らないことが大切だからです。

確かに「兄弟姉妹は生まれながらに結ばれ、同じ本性と尊厳をもちながらも、それぞれが多様で異なっています(2)。」宗教の多様性もそのひとつの表れです。このような状況の中で、とるべき正しい姿勢は、画一性の強制でもなければ、妥協的混合主義シンクレティズムでもありません。わたしたちが信仰者としてなすべきことは、わたしたちを創造されたいつくしみの主の名において、すべての人が同じ尊厳をもっていると認めること、対立の解決と多様性における兄弟愛とを求めることです。ここでわたしは、カトリック教会の確信するところを改めて主張したいと思います。「人は皆神の像として造られているがゆえに、もしもだれかに対して兄弟のように振る舞うことを拒否するのであれば、すべての人の父である神に祈り求めることはできない(3)。」

(2) 2015年「世界平和の日」メッセージ (2015年1月1日)、2。

(3) 第二バチカン公会議「キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言」5。

しかしながら、さまざまな問いが課されます。ただ一つの人類家族の中で、どうすればわたしたちは互いを守り合えるのか？ どうすれば、理論によるのではない、本物の兄弟愛を育てられるのか？ どうすれば、自分の帰属意識を理由に他者を排除するのではなく、他者を包摂することを優先できるのか？ 要するに、どうすれば諸宗教は分断する壁ではなく、兄弟愛のチャンネルとなることができるのか？

## 人類家族と他者を受け入れる勇氣

人類家族の存在を信じるなら、それはそれとして保護されるべきであるということになります。まずは、どんな家族でも行われるような、日々実際に交わされる対話から考えてみましょう。対話するためには自分自身のアイデンティティーを守ることが必要です、相手に気に入られるためにそれを捨ててはいけません。しかし、それと同時に「他者を受け入れる勇氣」(4)も必要です。相手を、相手の自由を完全に認めることです。そして相手の基本的な権利が常に、どこでも、誰によってでも認められるよう取り組むべきです。なぜなら、自由がなければ、もはや神の子たちは存在しないからです、奴隷だけしか存在しなくなるからです。さまざまな自由の中でも、わたしはとくに宗教的自由を強調したいと思います。それは単なる信教の自由にとどまるものではありません、他者のうちにほんとうの兄弟を、同じ人類の子を見ることです、それは神が自由なものとされたのですから、人間のつくったどんな制度によっても、たとえ神の名においてでも、強制することはできないのです。

(4)2017年4月28日、エジプト、カイロ、アル=アズハル大学の大会議場で行われた「平和のための国際会議」での演説。

## 対話と祈り

他者を受け入れる勇氣は対話の命となるもので、それは誠実な意向を基盤としています。実際に、見せかけの態度をとったりすれば、対話は損なわれ、距離や疑惑が増大します。兄弟愛を宣言しておきながら、そのあと反対の行動をとることはできないからです。ある作家によれば、「自分自身に嘘をつき、自分自身の嘘に耳を傾ける者は、ついには自分のうちにも周囲の人々のうちにも真実を見分けることができなくなり、そうして、もはや自分自身も他人も尊敬できなくなるのだ (5)。」

(5) ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』II, 2.

こうしたことすべてにおいて、「祈り」を無視することはできません。祈りは、神との関わりにおいては他者を受け入れる勇気を具体化するもの、誠実な意向によって心を清めるものです。それゆえ、「宗教間対話の未来について言えば、わたしたちが最初になすべきことは祈ることです。お互いのために祈ることです。わたしたちは兄弟なのですから！ 主がいなければ、何もできません。主と共にいればすべてが可能となります！ わたしたちの祈りが —— それぞれの伝統に従った祈りが —— 神の御旨に完全にそうものとなりますように。神はすべての人が、自分たちが兄弟姉妹であると認め合い、そのように生き、多様なものの調和のうちに大きな人類家族を形づくることを望んでおられるのです(6)。」

(6) 2015年10月28日、「キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言」発布50周年記念、一般謁見での演説。

共に未来を建設するか、あるいは未来はないか、二つに一つです。とりわけ諸宗教は、諸国民、諸文化のあいだに橋を建設するという緊急の責務を放棄することはできません。人類家族が和解する能力を磨きあげ、希望のビジョンを、平和への具体的な道筋を見つけ出す助けとなるよう、諸宗教が積極的に、勇気をもって、大胆に、率直に、力を尽くすべき時が来ています。

## 教育と正義

こうしてわたしたちは、平和の鳩という最初のイメージに戻るわけです。平和もまた、飛び立つためには、翼を必要としているからです。教育と正義という二つの翼を。

**教育** —— ラテン語では引き出すことという意味です、つまり、精神のもつ貴重な資源である潜在的能力を開花させることです。この国が、地下資源の採掘だけでなく、心の資源の発掘、若者の教育にもどれほど投資しているか確認することができて、実に励まされる思いがします。この取り組みが続けられることを、また他の国々にも広がることを願ってやみません。教育はまた、関係や相互性にもつながるものです。古代の有名な格言「汝自身を知れ」に、「兄弟を知れ」を付け加えるべきです。兄弟の歴史、文化、信仰を知ること、なぜなら他者がいなければ自分自身をほんとうに知ることはできないからです。わたしたちは、人間として、それ以上に兄弟として、「私は人間だ。人間に関わることで自分に無縁なものは何もないと思う(7)」という言葉、互いに思い出そうではありませんか。

(7) テレンティウス『自虐者』I, 1, 25. "Homo sum, humani nihil a me alienum puto." (*Heautontimoroumenos*, v. 77).

文化に投資することは、憎しみを減らし、文明と繁栄を増すことです。教育と暴力は反比例するものです。カトリック学院は —— この国でも地域でも高く評価されていますが —— 暴力を予防するための、平和と相互認識のための教育を推進しています。

若者たちは、しばしば否定的な情報やフェイク・ニュースに囲まれています。物質主義・憎しみ・偏見の誘惑に負けないことを学ぶ必要があります。不正に対して、また過去の苦しい経験に対して立ち向かうことを学ぶ必要があります。他人の権利を自分自身の権利を守るのと同じ力をこめて守ることを学ぶ必要があります。彼らが、いつか、わたしたちを裁くことになるでしょう。もしもわたしたちが彼らに、新たな文明との出会いを創り出すための堅固な基盤を与えてやれたなら、彼らはそれを善と認めてくれるでしょう。もしもわたしたちがかれらに、幻想と不幸で野蛮な対立という荒涼たる展望しか残せなかったとしたら、彼らはそれを悪とするでしょう。

**正義**は平和のためのもう一つの翼です。個々の出来事で損なわれることはあまりありませんが、不正という癌にゆっくりと蝕まれます。つまり、神を信じることができず、「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなた方も人にしなさい。これこそ律法と預言者である」(マタイ7・12) という黄金律に基づいて、すべての人と共に正義を生きようとするのができないのです。

平和と正義は切り離すことができません！ 預言者イザヤは言っています、「正義がつくりだすものは平和である」

(32・17) と。平和は正義と離婚したとき死にますが、正義は普遍的でなければ偽物となります。家族のメンバーだけに、同国人だけに、同じ信仰をもつ者だけにしか向けられていない正義は、びつこの正義、正義の仮面をかぶった不正義です。

宗教はまた、飽くことなき利益追求は心を鈍くすること、すべてをすぐに得ることに汲汲とする現在の市場のありかたは、出会い、対話、家族といった、時間と忍耐を必要とする生活の基本的な事柄にとって助けとはならないということを描く責務をもっています。諸宗教がもっとも弱い立場にある人々の声となりますように。この人たちは統計上の数字ではなく、兄弟なのです。諸宗教が貧しい人々の側に立ちますように。紛争・対立の夜の中で、諸宗教が兄弟愛の歩哨として、警備に当たりますように。人類が不正義に対して目をつぶることがないように、諸宗教が警戒を怠りませんように、世界のあまりに数多い悲劇を前にして決して諦めることがありませんように。

## 花咲く砂漠

平和の箱船としての兄弟愛についてお話ししましたが、いまから二つ目のイメージについて思いついたことをお話ししたいと思います。わたしたちを取り巻いている砂漠のイメージについてです。

ここは、わずかな年月のあいだに、英知と先見の明によって、砂漠が繁栄し人々を迎える場所になりました。砂漠は、人を寄せつけぬ手の施しようもない障害から、諸文化・諸宗教が出会う場所となったのです。ここでは砂漠に花が咲いています、年に数日だけというのではなく、この先何年にもわたってそうあるのです。砂と高層ビルとが出会うこの国は、西方と東方とが、北と南とが交わる重要な交差点、であり続けています。かつては人を寄せつけない場所だったのに、今ではさまざまな国の人々に仕事を提供する場所となったのです。

とはいえ、発展にも敵対するものがあります。兄弟愛の敵が個人主義だとすれば、発展の障害となるものは無関心だと言えるでしょう。それは花開く現実を、ついには不毛の地に変えてしまいます。実際に、功利主義だけに基づく発展は、現実的・持続的進歩をもたらしません。<sup>インテグラルな</sup> 全人的発展だけが、全体的なまとまりをもった発展だけが、人間にふさわしい未来を準備するのです。無関心は、利益を超えて人類共同体を、仕事を超えて兄弟を見ることを妨げます。無関心は、実際に、明日に目を向けようとしません。被造界に未来を心にかけて、外国人の尊厳にも子供たちの未来にも心を配らないのです。

このような状況の中で、昨年 11 月に、まさにここアブダビで、より安全な共同体のための宗教間同盟の第一回フォーラムが、デジタル時代における子供の尊厳をテーマに開催されたことを、わたしは喜んでます。このイベントは、その前年に、同じテーマでローマで開催され、わたし自身が全面的に支援し激励した国際会議で表明されたメッセージを受け継いで行われたものです。ですからわたしは、この分野に関わるすべての指導者の方々に感謝申し上げると共に、未成年者の保護という非常に重要な問題に対し、わたし自身とカトリック教会の支援、連帯、協力をお約束いたします。

ここ、砂漠の中に、豊かな発展の道が開かれました。この道は、仕事を出発点として、さまざまな国、文化、信仰に属する数多くの人々に、希望を提供しています。その人々の中にはキリスト教徒もいます、この地域におけるキリスト教徒の存在は何世紀も昔に遡るものですが、彼らはこの国で機会を見出し、この国も発展と安定に大きく貢献してきました。彼らは、専門的能力以上に、その良き信仰をこの国にもたらしました。彼らがこの国で受けた敬意と寛容、そして祈りの場所が保証されていることによって、彼らは霊的な成熟が可能となり、またそれが社会全体に益するものとなっています。わたしはこの道がずっと続くよう励ましたいと思います。ここで生きるすべての人が、またここに立ち寄る人々が、ここアブダビに対して、砂漠の中に立つ高層ビル群だけでなく、どんな人も受け入れる国というイメージをもちますように。

この精神のもと、ここアブダビだけでなく、愛する中近東地域全域で、具体的な出会いの機会がありますように。さまざまな宗教に属する人々が同じ市民権を持ち、その権利は、いかなる種類であれただ暴力だけによる以外は、奪われることがない社会でありますように。

教育と正義を基盤とし、兄弟として共に住むこと、受容とすべての人の権利の上に築かれる人間的発展 —— そこにこそ平和の種子があり、諸宗教はその種子を芽生えさせるよう招かれています。おそらく過去においてもそうだったように、このデリケートな歴史的状況において、先送りできない責務が、人間の心を非武装化するという責務が、諸宗教に負わされています。軍備拡張競争、勢力圏の拡大、他者を踏みにじる攻撃的政策は、絶対に安定をもたらしません。戦争は災厄以外のものを生み出すことはできません、武器は死以外の何もかも生み出さないのです！

人間同士の兄弟愛は、諸宗教を代表するわたしたちに、戦争という言葉に認めるようなことは少しでもあってはならないと求めています。戦争は悲惨で残酷なものです。その忌まわしい結果はわたしたちの目の前にあります。わたしはとくにイエメン、シリア、イラク、リビアのことを考えています。神がお望みになるただひとつの人類家族の兄弟として、共に戦おうではありませんか、軍事強国の論理に対して、金銭至上主義に対して、国境の武装化に対して、壁をつくることに対して、貧しい人々の口を封じようとする抑圧に対して。これらすべてに立ち向かおうではありませんか、祈りという柔らかな力によって、対話を通じた日々の取り組みによって。今日わたしたちが共にいるという事実が、信頼のメッセージとなりますように、すべての善意の人々への励ましとなりますように、彼らが暴力の氾濫や他者を思いやる心の砂漠化に屈することがありませんように。神は平和を求めると共におられます。そして天から、地上で平和への道を歩むすべての歩みを祝福してくださるのです。